

乳幼児期の育ちと保育を考える

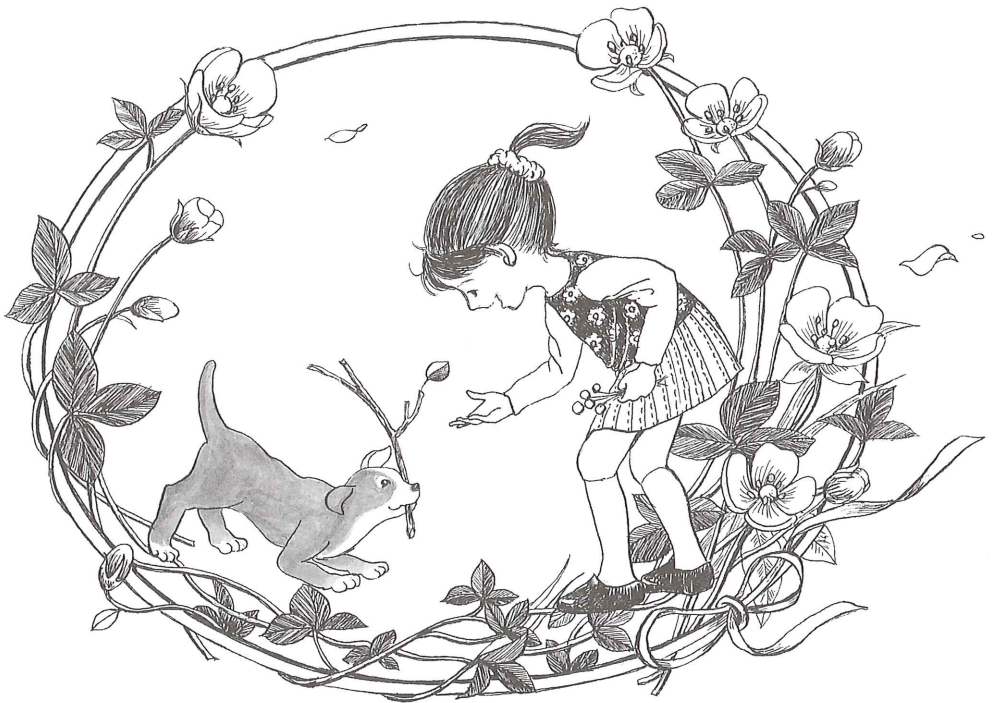
幼児の教育

特集

創刊110年企画
『幼児の教育』
アーカイブズ集 3

3

2011
特別号



好評発売中

● シリーズ 3 巻完結! ●

総勢101人から贈られた、保育へのメッセージ

THE 保育 -101の提言- vol.3

無藤 隆 編著



10503

26×19cm 226 ページ 定価 2,100 円 (税込)

21 世紀の子どもの育ちをどう捉え、どう見据えて
いか、様々な分野の著名人による保育への提言。
vol.3 は、フレーベル館の保育図書編集委員のほか、
保育研究者や各界の著名人の提言も掲載した完結編。

執筆者 (50音順)

網野武博(東京家政大学教授)、池谷祐二(脳科学者)、池谷奉文(日本生態系協会会長)、石津ちひろ(絵本作家)、内田麟太郎(絵詞作家・詩人)、大澤 力(東京家政大学教授)、大日向雅美(恵泉女学園大学大学院教授)、岡本弘子(高崎健康福祉大学短期大学部教授)、落合恵子(作家・クレヨンハウス代表取締役)、かづきれいこ(フェイスナルセラピスト・歯学博士)、金井真介(ダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパン代表)、上遠恵子(レイチェル・カーソン日本協会会長)、小林紀子(青山学院大学教授)、古賀稔彦(柔道家)、小菅正夫(獣医師・旭山動物園前園長)、佐伯一弥(東京家政大学短期大学部専任講師)、佐々木宏子(鳴門教育大学名誉教授)、汐見稔幸(白梅学園大学

短期大学学長)、柴崎正行(大妻女子大学教授)、鈴木 寛(文部科学副大臣)、鈴木光司(作家)、高橋 和(女流棋士)、ダニエル・カール(タレント)、苔米地英人(脳科学者)、長倉洋海(写真家)、長崎宏子(スポーツコンサルティング会社取締役・元五輪水泳選手)、浜 美枝(女優)、パトリック・ハーラン(タレント「バックンマックン」)、細谷亮太(小児科医・聖路加国際病院副院長)、増田まゆみ(目白大学教授)、師岡 章(白梅学園短期大学教授)、山極寿一(国際霊長類学会会長・京都大学教授)、葉 祥明(絵本作家)、吉村作治(エジプト考古学者)、渡邊眞一(学校法人初音丘学園理事長)

好評発売中



10501

vol.1

【執筆者】

小柴昌俊(ノーベル物理学賞)
椎名誠(小説家)
田原総一朗(ジャーナリスト)
坂東眞理子(評論家)
日原重明(医者・文化勲章)
やなせたかし(絵本作家)
ほか多数



10502

vol.2

【執筆者】

アグネス・チャン(タレント・日本ユニセフ協会大使)
紺野美沙子(画連開発計画親善大使・女優)
ピーター・バラカン(ブロードキャスター)
村上康成(絵本作家)
米村でんじろう(サイエンスプロデューサー)
ほか多数

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第110巻 第3号

目次

● 巻頭言 ●

月刊『幼児の教育』特別号のモチーフ（3）
— 新しいスタートへ — 浜口順子

4

● — 歴代編集主幹による — 『幼児の教育』にかけた思い（3） ●

『幼児の教育』の果たしてきたこと 津守 真

8

● 特集 ●

創刊110年企画『幼児の教育』アーカイブズ集 3

雑誌は時代と共に、人と共に

— 編み終えての語り、編集後記を中心に — 菊地知子

14

「たより」 (第33巻第3号・第6号・第7号より)

「會から」 (第45巻第1号、第50巻第12号より)

「会から」 (第51巻第2号より)

「編集後記」 (第54巻第1号より)

「後記」 (第54巻第12号より)

「韓国の夏」 (第89巻第12号より)

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

第110巻 第3号

〔編集後記〕 (第65巻第10号・第11号より)

〔編集後記〕 (第79巻第2号より)

〔編集後記〕 (第82巻第6号より)

〔編集後記〕 (第71巻第10号より)

〔編集後記〕 (第82巻第5号・第7号より)

〔編集後記〕 (第83巻第5号・第12号より)

〔編集後記〕 (第95巻第5号より)

〔編集後記〕 (第100巻第1号・第12号より)

〔編集後記〕 (第106巻第5号より)



● 園のくらしを育む 12 ●

子どもたちの姿(2) — 試行錯誤の価値 —

秋田喜代美

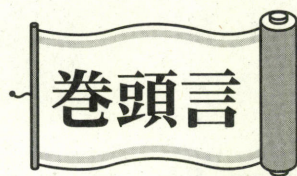
54

● 保育の現場から ●

縁という細い糸

永倉みゆき

58



巻頭言

月刊『幼児の教育』特別号のモチーフ(3) —— 新しいスタートへ ——

浜口順子

雑誌作りという経験

『幼児の教育』は次号から月刊誌という形を一新することになりました。その転換にあたり、これまでの雑誌作りで大切にしてきたことの一端を振り返らせていただこうと思います。

編集という仕事が思いがけず私に降りかかったのは、二〇〇四(平成十六)年でした。前任の田代和美先生からは、とにかく作る人が作りたい雑誌を作るべきだという原則を示していただきました。附属幼稚園教諭スタッフとの編集会議では、その雰囲気の中から見よう見まねで、まさに環境を通して感受性と模倣(ミメーシス)によって、慣れない仕事に着手しました。そして知らない間に自然と、保育に近い人、遠い人、両方の執筆者から文章をいただき、「子ども」や「保育」を巡る日常性をふと振り



返り、何かに新しく気づきつけかけになるような雑誌を目指していました。あるものは論理によってうなずかせ、あるものは感覚に訴えられ、そしてあるものは無関係に見える話題から新しい知の脈が通い始めるような、この多様性が掲載論文には大切なことと重なることは後でわかりました。奥付(最終ページ)に私の名前が出た最初の号(本誌第一〇三巻第九号)で、雑誌の「雑」という字にかけて、「種々さまざまなもの」が交じり合うことは、『不純』という軽蔑の意味づけに直結しがちであることを思い起こし、「雑」の意義を問い直したい」と書いたのも、そういう意味合いでした。

津守真先生が本誌の編集を五十六年前に引き継がれる直前に、倉橋惣三の自宅に編集協力委員が集まった際、「幼児教育の根本論」というと、深遠な理論を連想するかもしれないが、幼児教育は生活に身近なものであって、読者にふわりとした感じを与える記事が必要であることが話題になった」といいます(第一〇〇巻第一号 p. 9)。実践現場から直送される保育論に息づく生活感はもちろんですが、研究者が文献やデータをもとに論じた学術的な文章であっても、そこで追究されるものが子どもの世界や保育者の姿であれば、どこか「ふわり」とした雰囲気漂わすものが少なくありません。この「ふわり」感、掲載される文章の内容だけでなく、表紙やカット、誌面構成やレイアウトにおいても表れるよう、編集担当者たちが創意工夫してきました。



「編集後記」欄があること

「創刊一〇年企画アーカイブズ集」は今回「編集後記」がテーマになっています。この編集後記を書くという作業ですが、編集担当者が交代で担当する場合もあり、私も初めのうちはそうしていたのですが、最近は毎号自分で書くのがルーティンになりました。それでも、実は、なぜ編集後記というものが必要なかはまだよくわかりません。

舞台後の出演者の挨拶や映画のDVDのメイキング映像などは、鑑賞者が感動の余韻に耽りたい思いに冷水をかける面もあるかもしれませんが、一方で「演じ手にも別の素顔があり作り手には舞台裏がある」ということを改めて感じることで、なお一層、表現作品への興味が深まるという効果があるのではないのでしょうか。いろいろな雑誌の編集後記を見回すと、誌面作り中のエピソードが書いてあるもの、その時期に世間を騒がせている事柄や事件についてのコメント、編集者の近辺で起こったことへの雑感などなど一様ではありません。それでも、それぞれの雑誌の背後には人間の顔があり作り手の思いがこもっていることを肌身で感じられるのは共通で、おもしろいものだと思います。

私は大学教員をしています。保育学関連の授業で教科書を指定して使っていた時



のこと、学生から「この教科書に書いてあることは全部正しいのですか」と質問されて、ひどく驚いた経験があります。「教科書」というと正しい事実しか書かれていないという感覚、これは小学校からの学校教育の中で徹底的にたたき込まれてくる観念に違いありません。教科書に限らず、新聞・雑誌・インターネット情報などの文字と出合うことは、それらを書き記す人間とも出会っていることであり、それは同時に「正しい」という言葉の相対性から逃げられないということでもあります。パーチャルな距離感に慣れ過ぎず、間違ってもすれば傷つきもする人間が作り手であること、その体温を伝えたり感じようとする手間を、情報媒体の作り手と読み手は互いに惜しんではならないのだと思います。

「(保育の) 現場の人は保育の技術面の材料を欲しがる」が、「保育の根本を理解させ、その精神を伝えることを方針とすること」が本誌の独自の立場であると倉橋は話していたそうです(先の津守先生の文章から)。及ばずながら私たちも、この姿勢は変わらざる貫かなければならないと考えます。それはもとより「正しい」保育を讀者に教えることは全く違うはずで、作る人と読む人がそれぞれに考え、倉橋がわれわれに「足りない」と厳しく警告し続けた「根本考察」に向けて対話する場として、『幼児の教育』が少しでも貢献できるように歩み続けていきたいと思えます。

(お茶の水女子大学大学院准教授)

― 歴代編集主幹による ― 『幼児の教育』 にかけて思い (3)

『幼児の教育』の果たしてきたこと

津守 真



時代は変わり時は移ります。

『幼児の教育』は倉橋惣三によって長い間編集されてきましたが、思いがけず私が引き継ぐことになり、そしてさらに次の時期、さらに次の時代へと引き継がれようとしています。

時代は変わっても、幼児期の子どもの心、そのやわらかさ、かわいさは変わりません。

どこの国の子どももです。すぐに親しさを寄せてきます。幼児期は人間にとって特別に用意された賜物です。

私は倉橋と出会って間もなく昭和二六(一九五二)年米国に留学することになりました。

「いずこも同じ月を見るかな」と、婚約者を残して旅に出る私を送ってくださいました。

倉橋も大正七年に留学された時、同じ感想を抱かれたのでしょうか。

幼児教育を志す

大東亜戦争(第二次世界大戦)という大きな戦争を差し挟んで倉橋は幼稚園を守るため

に大変な苦勞をされました。

私は戦争の時、陸軍二等兵で、いちばん下級の二等兵はアメリカの奴隸にされると下士官から脅され、今では誰もそんな話は信じないでしょうが、その時は本気に心配しました。そんな時代でした。

私は昭和二六年から昭和二八年まで、一年半アメリカの大学で勉強することができました。私を毎月泊めてくださった方々との付き合いは、一生の間続きました。アメリカ人は一度信頼すれば長い間続くから、帰りが遅くなる時は必ず家に電話するようにと、行ってすぐに北川大輔先生から教えられましたがおりのでした。私は毎月違う家に泊めていただいでその期間を過ごすことになったのですが、ほとんどの方々とそれから一生の間、手紙の付き合いが続きました。その方々は一、二を除いてことごとく亡くなりましたが、その信頼と友情は消えることはありませんでした。国と国との関係は変化しようとも人と人とのつながりは消えません。

『幼児の教育』に書き始める

私が『幼児の教育』に文章を書き始めたのは米国留学中のことでした。米国で学び体験したことを、若い私はこつこつとした文章で、何回かにわたり書きましたが、その一方で私信として書いた手紙は、普通の人の日常のことでした。倉橋はそのことに興味をもち、次のような紹介文を編集後記に書いてくださいました。

本号にアメリカ通信を寄せていられるミネソタ大学大学院在学中の津守真君は、その私信において、その研究と生活の楽しさを書き送って、友人達を喜ばせています。殊に編者としては、アメリカ大学生生活の経験を想い出して、羨望に老心を動かされること頻りです。特に津守君が、ミネソタの教養ある家庭に客となって、アメリカ生活のいゝところ、にふんだんに触れる機会に恵まれていることは、誠にアメリカ留学の眞の利益を満喫していただけるものといえます。更に、その各々の家庭（津守君は同信のゆえに、幾つもの良家庭から次々に迎えられていて幸福の上もないことです）では、その子供達の親しみを得て、教室や社会では得られない、アメリカの家庭教育を、楽しさのうちに研究していられるのです。津守君は、大学のセミナーなど編者の著書や本誌を抄訳して紹介して、日本にこういうエライ（？）保育研究者がいることを吹聴して呉れているそうですし、また大学の連中や子供達にキンダーブックを見せて自慢して呉れることは、——そうして彼等を大いに感心（！）させているというたよりは、スコブる欣快の至りです。

（『幼児の教育』第五十一卷第六号 昭和二七（一九五二）年）

今回これを読んで、保育を志す一人の学生に対する温かな思いを知り、感謝の念に満たされました。この文章から、倉橋の保育研究者としての日本での働きが米国でも迎えられ、キンダーブックも子どもたちに喜ばれ、明るい話題として受け取られていることがわかります。倉橋の活動の拠点となった『幼児の教育』は、幼いものを守ろうとする先人の静かな熱気が伝えられる場でした。

『幼児の教育』による倉橋の社会への問題提起

時代は現代より大きくさかのぼりますが、『幼児の教育』第五十巻第七号（昭和二六年）には、倉橋が書いた「児童憲章の悲願―草案準備会に加って」が記されています。それには、今も変わらない保育学の核となるものが確かに述べられています。私がこの中で心を動かされたのは、理想としての児童観を述べるだけではなく、生活の現実や社会の通念によって現実がゆがめられる時、浮き世のありのままの児童問題と人間至上の児童愛との間をつなごうとしているのが児童憲章であると言われていることです。

理想は高くても法の力がないこの児童憲章について、法の力よりも強い万人のもつ現実の力ということに言及されています。

「法の力を以てして容易に実現されないものを実現する力を、信頼し所期せんとする心である。さて、その力は何によって得られるのであろうか、児童憲章はわれらの定めたものである。（児童憲章初頭の句）従って、児童憲章そのもの、力も、われらから生れるものでなければならぬ。くわしくいえば、われらが真に如何なる児童観をもつかによるものであり、児童を取り囲む現実を、われらが如何に真に、児童の幸福に一致せしめるかである。」

以上の倉橋の言葉は今に生きていて私たちを奮い立たせる力があります。

『幼児の教育』の現代的発展

『幼児の教育』の中で倉橋が言及していることは、現代の日本の社会でどのような意味をもっているでしょうか。後退したのか、消滅したのか、いや、子どもたちは幸福になったのかさえ、答えられない現在の状態です。

教育基本法は、多くの人の反対にもかかわらず改定されたことは、まだ記憶に新しいことです。基本法は個人の尊厳と平等の理念を掲げていましたが、それに反して遂に改定されたことを先人たちはどう見ているでしょうか。

戦後の新しい教育への先輩たちの静かな熱気と共に思い出されます。

二千人以上の人々の署名があつたにもかかわらず、教育基本法は簡単につぶされてしまいました。しかし保育研究者と保育者は悲観ばかりしていられません。かつての日、「新は真」と言つた倉橋の言葉にたくさんシンを加えたいと思います。

信じることのシン

辛さを抱えて時を待つシン

辛抱強い芯の強さのシン

歴史を支配したもう神を信じるシンなどなど

倉橋から学んだ「新は真なり」のシンは現代の風雪の中でどう展開し続けるでしょうか。

保育は人生そのもの

『幼児の教育』は、私にとっては、いつでも書きたいと思うものが内側に満ちてきた時に書かせてくれる有り難い場でした。

子どもの内面に目をとめて、真剣に見つめる時、それを表現する言葉として、「虚の自己実現」と私は言いました。また、子どもの行動は内面の表現だから、その行動を理解することが内面の理解であると考えて、「表現と理解」ということを言いました。それらは今に至るまで大切にしている私の考え方のひとつです。

私が「子ども」と言う時、健常の子どもだけでなく、どの子どもも障碍のある子どもも皆等しく含まれています。

どの子どもとも、共に生きたいと願って、私は大学から養護学校へと転進しました。幼児子どもの愛らしさは、どの子どもも変わりはありません。

この子たちの中に座って、楽しみ多い時間を過ごしていた時、私自身が脳出血によって書く機能を失いました。これで私は、この子たちと同列に位置する者となりました。

「保育とは人生そのもの」という言葉は私が人生の終わりになって言い得る感想です。

『幼児の教育』が、保育者にとっても保育研究者にとっても遠慮なく発表できる場であったことを心からうれしく思っています。

(保育研究者)

◆特集◆

創刊一〇年企画 『幼児の教育』アーカイブズ集 3

雑誌は時代と共に、人と共に

— 編み終えての語り、編集後記を中心に —

菊地知子

◆「その時」を生き生きと伝えるものとして

一一〇年も前から編まれてきた、雑誌としては日本最古参のこの『幼児の教育』は、いつの時代のどの号も、その時代に生きる「生きた人間」の手から生まれました。作り手の思いは、時代と無関係ではいられないでしょう。否、雑誌とはまさに時代の子。作り手は常にその時代時代の「生きている人間」でしかあり得ませんから、その時代時代を生きたその人の残してくれた言葉を通して、私たちはその時代

をkarouうじて知ることができるのだと思います。

今回アーカイブズ特集を組むにあたって、編集後記には、冊子に込める思いと時代への思いが凝縮しているのではないかと筆者は考えました。冊子を編む者がその時々になふと感じたこと、考え続けていること、見聞きし心に残っていることを、書き手は変わりながらも営々と書きつなげてきました。私たち読み手は、それらの編集後記を通して、現実として向き合うことはできなかったあれこれに、あたかも立ち合っているかのごとく、擬似的にはあれ臨床

的に、その時代を体感し歴史を読むことができるように思います。活字はここにこうして残り、活字に残してくれた人は今ここには居ませんが、それでもまるでその人が居るかのようには、ここに生きて息を息を吐くように感じるページがあります。いや、逆かも知れません。読み手である私たちが、活字を残してくれたその人の吸っていた同じ空気を吸っているような、また、においを感じるような、ライヴな感じ、とでもいいでしょうか。作り手が、行間に込めたもの、包まれていた雰囲気や空気。作り手の思い、時代性、即興性、季節感。それらが、活字ではあるけれど生きた人間の語りとして伝わってくる、その最たるものが編集後記であるような気がします。

もう、人の文字を活字に置き換える作業の行程は、時代と共にずいぶん変わりましたが、活字を通して伝えられるものは人の声であり人の思いであり考えであることは変わらないでしょう。

アーカイブズ企画三回目の今回は、読み手と作り

手をもっとも生き生きとつないできたかもしれない編集後記やそれに類するコーナーに注目し、読み手と書き手を実質的につないだ各号の最終ページ部分の「語り」に、まなざしを向け耳を傾けてみようと思います。

本稿で取り上げた記事は、文字遣い等なるべく当時のまま掲載するようにしました。

◆「編集後記」序説

一〇〇年の歴史をひもとくと、各号を編んだ感想なりその時の編集者の思いを伝えるようなページがあり続けたわけではないことがわかります。時代が下って、後記、あるいは編集後記が定番化してからも、たとえば一年を締めくくる十二月号には編集後記は載らずに総目録が載るようなことはありませんが、ばく雑駁にとらえたところ、戦後五年たった一九五〇年

に「会から」という欄が設けられるまでは、誌面の終わり方はさまざまでした。終わり方に限らず、各号の誌面構成にどうやら決まりらしきことはほとんどなかったようです。

『婦人と子ども』誌の時代に、巻末ではなく記事の合間に、倉橋による「机辺だより」というかなり長いコーナーがお目見えした一九二一年の一年を雑観してみましよう。

第十一巻第一号

「机辺だより」。クラーク大学の児童学研究。

同じ号に、「保育の実際」の寄稿求む、という記事があり、これも以後コーナー化している。その第一回では野口幽香が学習院女学部幼稚園の保育の実際を紹介している。

巻末には「雑報」というコーナー。

第十一巻第二号

「机辺だより」が二編。

巻末には「雑報」ならぬ「雑録」あり。

第十一巻第三号

やたらと広告が多い。おしろい、聖路加病院、牛乳、山羊乳など。

「机辺だより」は無し。

第十一巻第四号

「机辺だより」はなく、「途上だより」という、通勤途中の光景などの挿話的な話が三編載っている。

第十一巻第五号

「くくだより」等はない。

「保育の実際」は二編あり。学習院女子部幼稚園と坂本小学校附属幼稚園のもの。

第十一巻第六号

「保育の実際」も、編集後記的なものもなく、ページもやや少なめ。

倉橋の手になる記事は複数あり、そのうちの二編「今月二十一日」という記事はフレールベルの命日について。

第十一巻第七号

「幼稚園と小学校の課業上の連絡」という幼小連

携的記事。

「保育の実際」への寄稿を和田実の名で募集。

第十一卷第八号

「机辺だより」復活。「幼稚園の改良 スタンレーホール氏」。子どもの言葉の採取のようなこと。

卷末ページには和田実の、千葉県岡田貞子氏に告ぐ、という尋ね人のようなコーナー。手紙を紛失して返事が書けないから、もう一度はがきをくれよ、という内容。

第十一卷第九号

「机辺だより」は無し。

「幼児預所に就て」という倉橋の文章。神戸保育園を見に行つてのこと。

第十一卷第十号

「机辺だより」あり。第八号の続編「幼稚園の改良 スタンレーホール氏（第二） 遊戯に就いて」。

第十一卷第十一号

「机辺だより」あり。「幼稚園の改良 スタンレーホール氏（第三） 幼児の興味と本能」。

第十一卷第十二号

「机辺だより」あり。「人形の研究 サリー氏」。

シリーズ化しているようなコーナーにも定式がなく、3ページが必要であれば3ページを使う。奥付はあるが、編集後記やそれに類する欄はない。雑記、雑録、雑報など、称し方も実にいろいろでした。

千葉縣

岡田貞子氏に告ぐ

先頭小生病中に頂戴致し候御手紙取込申紛失
致し御宿所不明と相成り御返事差上兼候恐入
候へども今一度御はがき頂戴致し度候

和田 實

▲『幼児の教育』第11卷第8号の裏表紙

「たより」

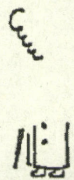
第三十三巻第三号（一九三三年）

○今年は格別雪が多うございました。お茶の水では雪だるまでも作るのがせい／＼でしたのに、さすがに廣々としたこの庭では、雪合戦、雪すべりと遊びが大きく、幼稚園の爲に特に降つたかと思はれる程活氣づいて來ます。色とり／＼の小さな手袋がストローヴのあみに並ぶのも、雪の日の可愛い、情景でございます。

○何ごとにも宜しく、みな様からのお便りをおまちして居ります。

○倉橋主事は本校から帽子と外套をかゝえてお出でになりました。なんとその外套は、女子高等師範学校中にて最も偉大なる體軀のM教授のものでありました。私がお見かけした時は一寸こんな様子。M教授の方ではどんなでせう。私の繪心だけでは描けません。

▲当時誌面の挿絵



○音に名高き人形芝居の菊池さんは郊外から近くの

音羽町に引越したのが、丁度幼稚園で最も忙しい新入園検定のころ。明日は抽籤といふ日の歸りに、明日は八時迄に來なくちや間に合はないのね。さうよ、ちや一番近い菊池さんに萬事お願ひすることにしませう。

ちや、この揭示もみんな。

ついでに椅子の雑巾がけも。

といふわけで朝になりました。肝心の當の人は七人の七番目、おごるわ／＼何でもおごる（わ）と駆け込み、起きたのが八時近くだつたそうです。間もなく白十字のショートケーキを御馳走になつたのはいふ迄ありません。

○神原さんは大のスキー禮讃者。雪といふ字を見ただけで、胸がときめくさうですから、執着心は腕前によらないと見えますね。それが、紀元節日曜とつゞくスキー列車の満員の日、躍る心を抑へてわが家につしんでゐました。それは翌日が幼稚園抽籤なのでその理由はかうです。

私、スキーに行くところの上真黒になるでせう、

さうすると、抽籤に澤山人が集つて来て、あら、この幼稚園にこんな眞黒な先生が居るのかしらつて思はれたら、主事にすまないぢやありませんか、だから我慢するわ。

然し皆様御安心下さいませ、倉橋主事はよにも稀なる心の寛い方ですから黒かろうが、青かろうがそんな御心配には及びませんのに。

○編輯子はじめに本欄でお目見得致します。昨年の暮に、「たより欄」をおくやう、新庄氏から奨められ、OK! とばかり承知しておきながらのびく／＼になつて居たのですが、それに業をにやしたのせう、二月號に獨りで同氏が皮切りしてしまひました。ところが豫想以上に好評なので、若しかして私がおほめに預つては誠に相濟みませんから、こゝに名譽を受ける人を明らかに致す次第です。

○いよ／＼昭和七年もこれでおしまひ。今は園兒をおくり又迎へる、重なる準備でお忙しくいらつしやいませう。今月は幼稚園の年頭號として編輯いたしました。「新保育期の計畫と所期」「新入幼兒

のむかへ方」の多數實際家の御言葉は、よろこんで頂けるものと存じます。學校關係は何處も年度末の御多忙と見え、今月はお約束の原稿で、頂けぬものが多くて残念でした。

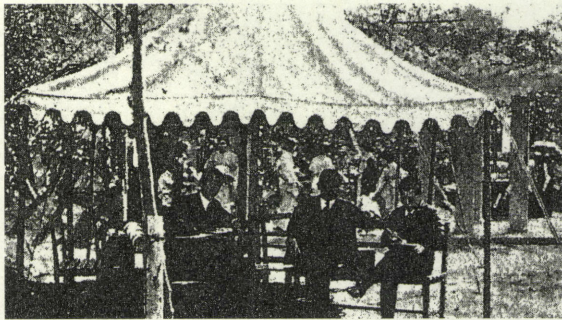
○この新園舎の様子をのせるやう、皆さんから御催促をいたゞいて居りますが、「お茶の水時代」も本號でをへましたので、來月號から追々に「新園舎ずまひ」を掲げる積りで御座います。(神原)

「たより」

第三十三卷第六号(一九三三年)

○こゝしばらくはい、陽氣でございますね。六月の始め完成した當幼稚園の庭でみどり會主催の園遊會がありました。

○幼稚園界の皆様へ、もし萬一どなたかがおでんや、か、おだんごやを開業なさる事になりましたら、その看板は、倉橋主事にお頼みなさいまし。大したものがございますよ、元來ピラ的藝術的味たつぷりの生れつきらしいございますから。園遊會で



▲当時の誌面掲載の写真

たへ墜落、満場
喝采裡に第二回
目をこ、迄御持
参、左の頬がふ
くらんでみます
ね、蒟蒻でもは
いつてゐるので
せうか。
眞中の堀主事を
見て下さい。こ
の時はすでに、
おでん、みつ豆、
おだんご、カル

のピラは全部同氏書のもの、十幾枚が、五分間で
出来上りました。しかもおでんやお小さんに、
是非と見込まれた程の腕前、一寸お知らせ申上げ
ます。

○これは、吉岡校長、堀小學校主事、幼稚園主事お
揃ひの一場面。校長は第一回のおでんは全部地べ

ピス、お菓子と、凡そ食べるものは、さつさと食
べてしまつて、丁度子供が、自分の所有は大急ぎ
で食べてしまつて、お兄ちゃん達のを羨しさうに
見てゐるつて、恰好に見えませんかしら。

○下のは、おわかりでせう、少しピントを外して寫
せと、紙製シルクハット氏の仰せで、御意のま、
にしっておきまし

た。こ、はみつ
豆の所。ずる分
はじつこで食べ
てゐる方があり
ますね、お向ふ
のは古川、及川
兩氏。何て、先
生ばかり一生懸
命食べてるので
せう。

○小雨ふる日。珍
らしく森閑とし



▲当時の誌面掲載の写真

た幼稚園の午後。元老不在。折柄洩れくるピアノのメロディー。久しぶりに聞く神原さんの「流浪の民」です。同女得意の一曲、但し始めの一節だけがそれに聞えるといふので任官七年以來有名なのでございます。これに合せて、村上、河合、小島諸嬢の合唱。おや、椿姫も聞えて來ましたよ、まあ、アヴェエマリヤも、君よ知るや南の國だのもね、かうして聞いている私がセンチになりそくなつて、ほんとに残念でございますよ。(新庄)

「たより」

第三十三卷第七号(一九三三年)

○今月は新庄さんから原稿が廻つてきません。察するところ、毎月の口、わるのた、りでもありましたか、こ、暫くなりを靜めて居るので御座います。

○口、わるといへば、お口の倉橋先生が先(週)中よりお口のいたつきでお休みでした。私達どんなに心配したか知れませんが、今度の講習では立役者なのですから。これ許りは代役不能ですし、第一お

客様が承知して下さいません。でももう御安心下さいませ。二三日前より御出勤で當日迄には大丈夫御本復と、信用ある醫者の證明があつたさうですから。

○今夏の講習は、はじめて午前午後通じて本會が主催するを機會とし、大いに新機軸を失したものと、私共はカミかへつてゐるので御座いますが、この期待を裏書きするやうに、先號が發送されますと早速おほめやら御鞭撻、共鳴のお便りと一緒に質問が續々とまゐりました。多數の待望する所だつたと見えます。何卒この試みが充分活用されて劃期的な講習にし度いものです。皆様どしどし問題をお出し下さいませ。問題は成るべく早く頂いた方が好都合で御座います。(編輯子)

保母たちはきつと、保育以外にもたくさん時間を、仲間と共に過ごしたのかもしれませんが。誌上でも、皆茶目つ氣たっぷりで、彼女たちの目の前で起

こつていることや練り広げられたこと、今まさに聞こえてくることなどを愉しそうに書いていることがうかがえます。

新しい者同士がくすぐり合うような雰囲気やそのような文字の上でのふざけ合いは、内輪受けと言つてしまえばそれまでですが、実際の日々においてもそれらが許されていたおおらかさや飾り気の無さに、時代の移り変わりとともに失われた、あるいは失いつつあるかもしれない何かしらを感じることも確かです。

◆語る相手を感じ続けて

時代をぐつと下り、以下に載せるのは、戦後一年から数年というころの誌面の「会から」という欄のものです。戦後『幼児の教育』が復刊した時からしばらくは、編集後記にあたる巻末部分に「会から」と題した一文が載るようになりました。「会から」とはすなわち、『幼児の教育』の母体であるフレール会からのお知らせ、ということであり、夏の講

習のお知らせがあるから早めに出した、参加は無理をしないように、などと書かれることもありました。語りかける相手は、実際に保育にあたっている人たちであることがはっきりとしています。そのころの記事の中にも、たとえば一九五〇年の八月号に「みなさま毎日幼児の教育に全身を打ちこんでおられると思います」等と書かれています。実践者に宛てて書かれていることがわかります。

また、倉橋による「会から」は、往々にして非常に多弁です。各号の本編記事の紹介にとどまらず、読者の注意を喚起したり、世の中の動きについて報告やお知らせをしたりと、違う種類の内容をさまざま盛り込んでいることも少なくありません。

つまりは、編集後記と意識されたページに先立つて現れた「会から」というコーナーは、その号を編み終えての補足やお知らせなど、掲示板的な要素が強いということなのかもしれません。

それにしても終戦から一年、一九四六(昭和二一)年九月に第四十五巻第一号を出した時の編集者たち

保育に關する御意見、御體驗、また保育界の實情等につき御寄稿を歓迎すると共に、本誌に對する御希望、御高教をお示しいたゞきたい。尚、復刊に就て讀者の擴張についても、有力なる御盡力を希ふ。

○わけてもお願ひ致したいのは、お移りになつたり、新らしくお開きになつた幼稚園は勿論、變りなく盛にやつてゐるといふお報道やかういふ計畫中だといふ御報告や、御自分のお知りあひのもの、是非お通報いたゞきたいことです。誌友名簿を確實にする爲に。

戦後どのくらいで世の中はどのくらいの平穩さ、平和な状態を取り戻したのでしょうか。いや、おそらくは、取り戻したのではなく、まだ見も知らぬ平和な社会を、新たに創造しようとし始めたということでしょう。戦禍が歴史の上のことになるにはおそらくまだまだ近過ぎる過去であつた戦後五年というこ

ろ、新しい希望はどれほどそのつぼみを開花に向けて柔らかくしたのか、わかる由もありませんが、一九五〇(昭和二五)年、第四十九卷第八号の「会から」の欄には、認定講習のことや誌上で取り上げた新たな論考のことなどと並んで、すぐお隣り朝鮮半島での争いへの心懸かりが綴られています。おそらく日本にとってまだまだ完全に過去の歴史になりきらない、することのできない「あの」戦争というのが、今の世界にしかも非常に近いところでもた起こっていることへの憂いは、表明するに憚ることなく記すべきこととして倉橋の中にあつたのかもしれない。

また、翌一九五一年の第五十卷第六号は、フレール一〇〇年を記念する祝賀号というような趣きで、卷末の言もほほそれ一色です。先に見てきた『婦人と子ども』時代から、批判も含め大いにフレール研究をしてきた倉橋にとって、また、彼の名を冠するに至つた出版社とのつながりの深さにおいても、フレールの死から時を経ること一〇〇年、という

事実は、非常に感慨深いこととしてあったのでしよう。また、フレーベル一〇〇年にかこつけてであれ、子どもや人間を学ぶ者であれば繰り返してその意義を確認するに足る「児童憲章」への言及があることも、児童の幸福を希求しようとする動きへの共感として受け止めることができるように思います。

そのころの「会から」より二編を以下に掲載します。一つめは一九五一年の第五十巻第十二号。五十巻を終えることへの感慨に、「保育界全体のものとなるために」全体の希望に副うものになりたい、と言ひ、読者には、記事の精読や研究を勧め、子どものためにも健康が守られるようにと祈ります。

また、第五十一巻第二号では、お得意の洒落も混ぜながら、寒さの中の保育があなたかく行われるようにと、話して聞かせるような名調子で綴られています。ここでもまた、語りかける相手が、実際に保育にあたっている人たちであることが明確であるように思います。

「会から」

第五十巻第十二号（一九五一年）

○本巻を終りあわせて本誌第五十巻を終ります。第五十一巻を迎えることは、編集に新しい緊張を感じさせます。と共に、一層の新しい御好誼を願わずにいられません。

○編集の方針、その他についても、充分の御注意なり御勧告なりを願います。保育界全体のものとなるために、先づ全体の御希望に副うものになりたいたと心がけています。

○上沢氏は童話界の先人。話の選び方は常に話し方に先だつ重要性をもつ問題。精読の上充分考えを養つて下さい。

○村山氏の論文は、読むばかりでなく、各幼稚園、各保育所で、必ず実行されなくてはならないこと、しかし、必ずしも容易でない実際問題を懇切に説いていられます。是非研究し実行して下さい。

○おい／＼寒さが増します。先生方の御健康を祈ります。先生方がかぜをひいて休まれるのも困るこ

とですが、こんくせきをされるのも、子どものために心配です。充分おだいじになさつて下さい。○よき新年を迎えられるように。

「会から」

第五十一卷第二号（一九五二年）

○二月の窓を開けば風が寒い。窓を閉ざしつゞける
と室内の空気が悪い。殊に火鉢などを用いている
とき、二酸化炭素が健康を害する。窓一つ、あけ
ようか、しめようか。先生の氣ばたらきはこまか
い。

○二月の保育室には必ず、寒暖計が備えつけられな
ければならぬ。しかし、備えつけてあつても、見
なければ備えつけてないのも同じである。見て
も、標準の度が分つていないと、見ないのと同じ
である。こわれているに至つては室の装飾にもな
らない。

○晴れた日のテレスに日だまりの暖かさを楽める設
備は、洋風建てには一つの必要といつてもいい。

それが無かつたら、何とか設備したい。大工さん
に一日も働いて貰えば容易にできるだろう。先生
方にだつてむつかしい仕事ではない。ピルグリ
ム・コツテージ風の極く簡単なのでいゝし、却つ
て趣きがあるだろう。先生は不器用でも困るが、
不精では尚困る。

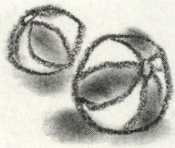
○庭のぬかるみは、子供を室外不出にさせる大障
碍だ。雪解けの大ぬかるみは別として、毎日の霜解
け位は、一寸した用意で何とかできそうであ
る。子供の靴を泥で重くさせて、だからお部屋に
閉じこもつていなさいというのにといつても、空
は紺青のきさらぎ空に晴れて居り、霜の多い朝に
限り、特別にぼか〜と日が照つて居る。

○二月は寒いく〜というが、末頃になればそろ〜
春の来るのを感じさせる。その早春の訪れを迎え
る用意もほしい。早咲きの梅の木の本位ほし
い。アスファルト庭で木が植えられなければ、梅
の小鉢の一つ二つ、迎春使として南の窓において
やりたい。若し、南斜面のところでもあつて、草

の芽が楽しめる仕かけになつていたら、早春のために門をあけておいてやるようなものだ。それらの待ちもうけて子供らと共に、春の若神を迎えに出でまし給う先生の楚々たる歩みの、いとゞみやびにいますことよ。二月の女神ともいおうか。

○二月鍛錬も、新興小国民の保育に必要かも知れない。しかし、ぬれ足袋保育、凍り弁当保育、これ障子保育、せきコン／＼保育、などは、タンレンを越えるかもしれない。少しはレンタン保育を加えても、子供を弱くする所以ではあるまい。

○毎年の出欠表を出して、二月はどうも風邪欠席が多いのが通例ですとおつしやるがそのかぜをひかせる保育法が通例という訳でもあるまい。幼い子供の病気は、まだまだ、おとなの不注意からです。その不注意なおとなの中に先生が居ては申訳ありません。二月の感想です。



◆「幼児の教育」新時代の訪れ 継承のみでは語れない創造展開

一九五五（昭和三〇）年の、その名もまさに「編集後記」を二回分、見ていきたいと思えます。

一つめは第五十四巻第一号、すなわち年初に出されたもので、記名こそありませんが、当時の編集後記の常で、倉橋の手になるものと思われまます。

そして、その年十二月の第五十四巻第十二号には、新編集主幹津守真によると思われる「後記」が見えます。第一一〇巻第二号において本田和子氏が確認されたとおり、『幼児の教育』誌は、「倉橋なくして本誌なし、また本誌なくして倉橋は倉橋たり得」なかつたのでしょうか。しかし、倉橋の死をもって新時代へと舞台を移した『幼児の教育』を牽引した津守のなそうとしたこと、またなし得たことは、倉橋の遺産を引き継ぎ、内容形式とも、その継承、維持に努めただけではなかった、というのが筆者の見解です。誰もが認める『幼児の教育』の立役者倉橋の、

次なる主幹となった津守の独自性、子どもたちの、私たちの、今はどうなのか、未来はどうなのか、ということのみを、人を信じ明日を信じて愚直なまでに大まじめに問うた革新性を、今回編集後記を中心に読み直す中で改めて強く感じました。そしてそのことを、ほかならぬ倉橋が驚きと共に見抜き、齢にして四〇以上も違う津守真という若造を信頼し敬愛したのではないかと思えます。

筆者は大学時代を含め六年ほど、母子愛育会家庭指導グループで、津守と保育という営みを共にしてきました。恩師である以上に、保育者同士、仲間同士として付き合える幸運に恵まれていたからでしょう。津守の、ある意味いついかなる時も自分流で、年齢や立場に左右されず、誰のことも信奉したり崇めたりはしない姿、誰のことも対等に人としてあたりまえに尊重する姿を、僭越ながら知り得ていません。編集主幹を引き継いだ一九五五年には、津守は弱冠二九歳の若造ですが、それに数年先立つ出会いの時から、倉橋はこの生意気で思ったままを何のひ

ねりも気遣いもなく言う若者の真価に気づいて、自分自身もより研究的な方向に舵を切り替え、遊び心たっぷりの軽妙な感じからやや脱却して、その後半生を津守真を同志として歩もうとしたのではないでしょうか。

倉橋自身の言葉として津守に抱いた気持ちを書くことはもはやできませんが、津守は、詳細な日記を手元に置きながら以下のように語っています。出典は『幼児の教育』第一〇九巻第二号におけるインタビュー記事「『まめやかさ』―人として人に応える」。ちなみに筆者も、このインタビューに同席し記事の構成をさせていただきました。

「一人の人間として出会うというのが、先にお話ししたように、一番初めから、それはしつかりと私の中にあつた。倉橋先生には初めて会った時から、この人は信頼できる人だと感じました。これもまた不遜な言い方かもしれないけれど、倉橋先生もそう感じられたのではないかと思います。」

以下、第五十四巻の記事二編です。

「編集後記」

第五十四卷第一号（一九五五年）

新しい年、昭和三十年を迎える。来るべき年の曙に當つて、先ず読者諸氏と共に、心を新たにしてい
青空に杉の木立が伸びゆくように、幼児教育のすく
すくと育ちゆくことを祈る。

来るべき年は、我が国にとつては内外共に多事多
難の年であるが、幼児教育界にとつても平坦な道
ではなさそうである。保育室の内外共に、解決すべ
き問題が山積している。行政経営、管理の面におい
て、又保育の内容において、幾多の困難な問題が横
たわつている。表面隆盛に見える保育界も、幾多の
分裂と、解決されざる問題の山積によつて混沌とし
ている。と云つては云い過ぎであらうか。よりよき
社会と幼児教育の前途のために、純粋な努力を捧げ
る幼児教育の任に当る人々の努力によつて、いくら
かでもよりよき方向に問題が解決されなければなら
ない。本誌は保育界の諸問題に関する各方面の意見

と、保育の諸問題に関する忠実な研究によつて、我
が保育界が更に一步前進するよう望んでいる。直
接、間接に幼児教育に関係される方々から、意見と
研究とを寄せられる様お願いする。

新年号に當つて、久松幼稚園の高間富子氏からは
新築園舎の夢をめぐつて、武南高志氏からは私立幼
稚園界の抱負を、三木安正氏からは保育界における
研究についての感想を伺つた。米国における幼稚園
教育の全国大会に参加されての記事をよせられた黒
田成子氏は、新しい幼児教育を専門に研究された
新進の保育研究者である。久々で幼児の健康につ
いて執筆された竹村一氏は本誌の古い誌友である。

「後記」

第五十四卷第十二号（一九五五年）

今年の一月号の本誌は、故倉橋惣三主幹の巻頭の
言に始まって、第五十四卷の半ばにして倉橋主幹の

天に召されたことは、本誌の五十四年の歴史の中でも誠に大筆すべき大事件であった。倉橋主幹の言葉をもって始められた此の巻を終るにあたり、その半ばにはからずも特集することを余儀なくされた六・七月号をとりあげてみて、誠に感慨無量である。再び倉橋主幹の温情溢れる声に直接ふれることのできない物足りなさを思うのである。されど倉橋主幹は天寿を全うされたとはいえ、本誌の使命は未だ終らず、我が国の幼児教育界はいよいよ進展し、発展の歩を進めてゆくであろう。長い歴史の眼から見れば、一つの事件は生成発展しゆく社会の一つの鎖にすぎない。倉橋主幹の四十年にわたり本誌に刻まれた足跡は、人も知る如く誠に輝やかしい足跡であった。私どもはかくして結ばれた鎖に又新たな鎖をつなげてゆくことができる。我が国の幼児教育の諸分野にわたって、更に新たな理解を加え、本道をふみはずことなく、正しき方向に発展の道を進めるために力を合わせるができる。現代の我々の社会

は、広い社会の問題はもちろん、一つの専門分野においても、相互の理解と協力を必要としている。正しい方向に我が国の幼児教育を進めるために、此の分野及び隣接分野に関してよりよき理解を求め、理論にそして又實際面に更によりき洞察をうるために、今後本誌はその努力をつづけるであろう。教育の問題は単に一分野の技術の問題にとまらず、広く人間及び社会と関連するが故に、我々は一層広く大きい洞察を必要とするのである。本誌はその問題をたえず考えて来たし、又今後も考えつづけるであろう。そして我が国の社会が健全に発展するために、幼児教育を通して努力したい。

本巻は、予期しない行事がいろいろ出て来たために、誌面の都合で、掲載すべき論説や研究で収載しきれないものが沢山ありました。そのために読者及び特に執筆の諸氏に御迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。

読者諸氏のよい年を迎えられますよう祈ります。

◆保育の理論と実践研究の間での生まじめな逡巡

以下に挙げる論考は、編集後記やそれに類するものではありません。掲載された第八十九巻第十二号は、巻末に一九九〇年一年を通しての総目録があり、編集後記はありません。ある時期から、それが十二月号の常です。ただ、その号は筆者にとつて、「特に書き足すことはありません。ただどうぞお読みください。お読みいただければわかります」という、編集後記がないことによるメッセージを受け取りたくなる号の一つです。その号には、当時日本保育学会長であった莊司雅子氏による巻頭言「キンダーガールの本来の意味」があります。サブタイトルには「幼稚園創立百五十周年を迎えて」とあり、そして件の「韓国の夏」という記事が続きます。署名は津守真、文末には愛育養護学校のクレジットが入ります。一九八三年にお茶の水女子大学を退官し、『幼児の教育』の編集主幹からも身を引いた氏でありました。内容はといえば、今日この時代にまたしても、

時の政治との兼ね合いの中で議論喧しい「幼児一元化」について主に論じられているのです。

その人がそれを書く「その時」において、書かずにはおれない思いを抱いていることをそのままに掲載するということ。それは、雑誌の体裁上のタブーも顧みずに、すなわち、季節感とか他の記事とのバランスや関連性など、細かいことにとらわれ過ぎることなく、『幼児の教育』という雑誌がただただ愚直に、書き手本位に、書き手への全面的な信頼の上で誌面を構成してきたことの証左であると思います。そして何より、その内容が当時の隣国の時宜になつているのみならず、まさに私たちにとつての今日的な課題にも大いにつながるものであると考えます。その時の熱情でのみ語られたのであれば、その場ののぎよろしく風化していくのでしょうか、津守真の、切実な祈りにも似た言葉はどこか汎時代的汎空間的であり、時代を超え国を超えて、容赦なく私たちに判断や思考を要求しているように思います。

「韓国の夏」

第八十九卷第十二号（一九九〇年）

今年の夏の終わり、新学期の最初の日、私は韓国幼児教育学会に招かれて、はじめて韓国に行った。二晩だけの忙しい旅行だったが、韓国の幼児教育関係者たちの熱い思いに触れて、私は現代に生きていくことを実感させられた。

韓国では、学校教育法のほかに、低所得層の家庭の幼児を対象にした幼児保護法が制度化されようとしており、幼児教育関係者の間に議論が起こっている。韓国の社会は、丁度、日本で学校教育法と児童福祉法とが二元化された以前の状況にある。それがいま、日本のように幼・保が二元化されようとしていることが、この法制化に対する反対の大きな理由である。ことに、「保護」だけが取り上げられ、託児という形で簡便に片付けられようとしていることも問題である。保護（養護）と教育とは、幼児教育（あるいは幼児保育）において切り離すことはできないという考えが現代の世界の動向なのに、あらためて二元

化の制度を作ってよいものか、私も疑問に思う。

日本では、幼・保が二元化されているのがすでに当然のことで、その前提のもとに財政措置もなされているから、児童福祉法のようなものが作られることは結構なことではないかと考える人が多いかもしれない。しかしそれは現状を固定して考える考え方である。かつて、幼・保が二元化される以前、あるいは二元化された当初には、幼・保は一元化されるべきであるとの意見が多かった。その当時は、幼稚園も保育所も、教育も福祉もすべてを含んだ児童省という大きな構想もあった。もしもそういうものが実現されていたら現在はどうなっていたらだろうか。

韓国はいま丁度その分かれ道にある。

日本では幼・保二元化の制度に順応して、両者がそれぞれに機能を発揮するように努力がなされてきた。幼児数が増加するときには、うまくいったのだろう。それでも幼稚園の隣に保育園が作られる

というようなことはしばしば起こった。また、保育所だけしかない市町村、幼稚園だけしかない市町村などと、どちらかに偏在している地域もある。このことは、いずれが両方の機能を果たしていることになる。どちらか一方があれば、幼児期の保育機能はみたとせると親は考えていることの証拠ではないだろうか。

現代の日本では、保育所は経済的貧困の家庭のみを対象にしているとは言えない。むしろ、経済的には裕福でも母親が働いているために保育に欠けると考えられる幼児が保育所に通う場合が多いだろう。働く母親は、今後も増加しつづけるだろうから、保育所の機能に対する要望は増加しつづけるだろう。現代の家庭及び子どもの生活形態は急激に変化しつつある。長時間保育だけではなく、多様な要望に柔軟に応ずる保育が必要とされている。家庭と保育施設との両方が協力して、幼い子どもが生活しやすいうように人的物的環境をつくってゆかなければなら

ないのが現代である。

高層住宅の中で子育てをしている若い母親は、乳児期から、母子に対して開かれた、自由度の高い共同の子育ての場を求めている。これが急務であることは、幼い子どもに少しでもかかわりのある人には分かっていることであるが、これは保育園の仕事なのか、幼稚園の仕事なのか。本来は両方の仕事であるが、制度上はどちらにもはいらない。子どもと家庭の要望にこたえることのできる柔軟な制度が必要とされる。英国で最近では、文教局と福祉局を統合したナースリーセンターが発展しているのは、このような社会変化への対応であろう。

四十数年の幼・保二元の制度の歴史を経た現在、日本の社会で直ちにこれを一元化したら混乱も生じるだろう。しかし、この両者が柔軟に協力しあう体制ができなければ、決して解決しないであろう問題が、私の周囲にもいくつもある。

また制度が二元化していない社会では、その経験

をへた社会での功罪をよく検討してほしいと思う。
 韓国の幼児教育学会の親しい方々から講演の依頼を受けたとき、私はこのようなことを考えて、これをお引き受けした。

九月初旬のソウルは、急に涼しくなった東京よりも暑いくらいだった。この夏は特別に暑い日々が続いたという。その夏の間、幼児教育関係者達は、この法案が早急に定められないように、資料を集め、討論し、精神的にはたらいたという。この運動が成功するかどうかは分からないが、一元化のために最大の努力をした事実を後世に残したいのだとその指導者達は語っていた。私もそのことをここに記録にとどめておきたい。

私が二晩泊ったヨンセイ大学のゲストハウスのすぐ前に、大学付属のナースリー・センターがあった。夜になってから、わざわざ門をあけて案内して頂い

た。深山を思わせる緑の丘の中に、住宅風の洋館が三つ点在している。靴を脱いで入ると、子どもの衣裳がハンガーにかかり、子ども用のソファアールがあって、いかにも子どもの家という感じである。オープン・エデュケーションの考えでやっているとのことだった。このナースリー・センターは大学の家政学部所属で、建物は家庭科のモデルハウスをもらいつけて改装したのだという。

私は今回の講演では、制度を中心に、この四十五年間の日本の幼児教育と保育について語った。そして、制度がどのように整備されようとも、そこでなされる日々の保育の質の向上が重要であることを結びとした。この現代に、子どもが生きやすくなるように、子どもの側に立って仕事をする者には国境はないのだと思う。子どもの側に立つ戦いをしていく人々は世界中にいることを、今回も私はあらためて認識した。

(愛育養護学校)

文末にある「子どもの側に立つ戦い」という一言は、今なお私たちに重く響くように思います。

さて、右の論考により筆者は、一九六六年の、就学年齢引き下げについての特集を想起しました。子ども学の徒として、子どもにかかわる時の争点に、臆することなく論客を立て、思い思いに書いてもらい誌面に並べます。しかも、それを「思いついてしまった」時の号にとどまらず、次の号でさらに新たな論客を得て、論考を並べるのです。まさに、世界の動きをわが事として引き受けようとする、やる気というべきか、勢いを感じますし、『幼児の教育』が、子どもにかかわることであれば社会的時事的関心事についての論戦を張る場でもあり得た（であろうとした）ということでしょうか。

続いて載せる第七十九巻第二号では、行事について二〇人ほどに聞いたら六人から返事が戻ってきたというところで、その六人からの行事についての報告が掲載されています。『幼児の教育』が何をなさんとするのか、幼児の生活の基本に立った時、何を大

事に考えればよいのかを問うている点において、以下四編の編集後記には揺るがぬ同じ思想が流れていることがわかるように思います。

「編集後記」

第六十五巻第十号（一九六六年）

米国のジョンソン大統領が、四才就学の構想を発表したことをめぐって、新聞雑誌などにも就学年齢引き下げに関するいろいろの議論があらわれ、また、文部大臣も、就学年令引き下げについて検討している由の談話を発表されたりしている。就学の年令を引き下げるといふ論の根柢は、近年、幼児の発達が早くなっている、いわゆる発達加速現象を重視するところにあるらしい。それに加えて、世界の科学教育に乗りおくれないように、早くより知的教育を進めるといふ論である。

このような主張に対して、幼児教育の専門家はもと答えるであろうか。幼児の発達が、以前の幼児に比して早くなっている面のあることも事実であろう。

社会的関心や知的関心が早くにあらわれるようになって、経験するところであろう。しかし、それは、現在の小学校一年生の課程を引き下げることによって、解決される問題ではないであろう。あるいはまた、抽象的な科学的概念を早くに導入することによってなされる問題でもないであろう。幼児の発達は、一部には早くなっている面がありながら、他面、幼児の生活を支配する精神構造は、幼児的にかわらないものも多くあるであろう。

米国の学者にきくところによると、ジョンソン大統領の構想は、米国における貧困階層のための教育対策であるという。すなわち、就学年令を引き下げることによって、貧困児もひとしく幼児教育の機会が得られるようにという趣旨のようである。

発達が早くなっているということから、学令を引き下げればよいというように単純に結びつけて考えることは、ずいぶん性急なはなしである。現代の幼児の発達に適した生活環境と教育とを、幼児の生活の基本的理解に立って、根本的に考えねばならない

問題である。発達促進化に対する性急な対策が、かえって、幼児の真の能力の発展を阻害する結果になることを憂えるのである。
(T)

「編集後記」

第六十五卷第十一号（一九六六年）

南アフリカでは、人種問題が複雑に渦を巻き、中国では精神革命が嵐を起こし、世界は互いに衝突しあっている。というのがこの夏の国際情勢であった。南アの問題、海を隔てた中国の問題を対岸にみて、日本からは他人事のようにみえるけれども、世界の舞台の上においてみると、中国、ベトナムは、日本列島と相接する地域、隣国である。南アは地球の反対側とはいえ、小さくなりつつある世界においては、アフリカはもはや決して世界の果ての密林ではない。人種の差を超えて人間は平等であることを主張する声の湧き起ころうである。世界の動きを対岸の火事とみて、かりそめの平和に安住していることは許されないのが現代である。今の瞬間には、

「編集後記」

第七十九卷第二号（一九八〇年）

運動会や入園式などの行事を、子どもの側から見てみると、疑問を感じることが多いので、今月号では行事報告の特集を試みた。いずれも本誌の「私の保育」に執筆された優秀な先生方である。二十人程の方にお願ひしたのであるが、六人の方から報告を頂いたのでそれを掲載した。どの園でも、行事は関係者の間で「綿密に」連絡し合い、準備にも、当日のことにも「気を配って」実施し、皆が気持よく過せるように工夫が重ねられていることがよく分る。先生たちがこれだけのエネルギーを使っているから、園による個性があらわれている。報告を寄せて下さった方々には、今後の工夫のための材料を提供して下さったことを感謝したい。

この行事報告を見て、私は幼稚園の生活は、人工的につくりものではなくて、生きた実生活そのものであることを改めて考えさせられた。幼稚園の生

活は、ふだんは子どもと先生との生活であるが、行事になると、親や他のおとなたちも一緒に参加する。そしてそのときには、先生もただのおとなになって交わる。

園の側から言えば、それだけ大きなエネルギーを使っているから、子どもにもおとなにも満足のいく行事とすることができるのであろう。幼稚園の生活では、どこまでも子どもの日常の遊びが主である。先生のエネルギーの主たる部分はそこに注がれるのが至当である。行事は、ときに墮性に流されがちな日常の反復に張りを与える。お誕生日やクリスマスが子どもに楽しみや希望を与えていることは、だれもが身近に見るところである。また保育者は、幼稚園の先生も親も、日ごろ自分を抑えていることが多いから、ときに子どもと一緒に楽しくなるのは自然なことである。

行事が子どもの悩みの種にならず、楽しみとなるように願っている。

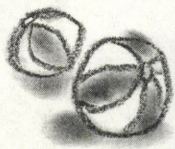
（津守）

すでに二カ月前のことであるが、四月号のこの欄で、私は入園式のことをとり上げると記したことを、四月号を手にはじめて気がついた。三月号では卒園式のことを扱ったが、四月号に入園式の記事はひとつもない。こんな自明な誤りを記したことを、まず、お詫びする。

多分、私は卒業式の別れのことを考えるのは苦痛で、むしろ未来に目を向けたいと思っていたので、こんな誤りをしたのかもしれない。また、それを書いていたころ、予算や社会関係のことで毎日が一杯だった。二月と三月は、教育関係者はだれでも多事多難だから、弁解にはならないのだけれども、子どもと一緒にいるときには、子どもの仕事ほど良い専門はないと思える。ところが、子どもの生活を成り立たせるための、まわりの環境を用意する仕事になると、こんなに大変な仕事はないのではないかと思うことがしばしばである。財政、制度、物的環境に

関すること。また、それをととのえるために人間の理解を得ることの困難さなど。ことに、子どもが存分に遊び、生活することができるような、ひとつの幼稚園や学校を成り立たせるのには、現場の先生のみならず、主任や園長の苦勞は並たいていでないことは、容易に察することができる。緊張に満ちた現代に、子どもの生活の基盤をあずかるとき、子どもと社会との中間に立つ仕事は、あるときには苦澁にみちている。けれども、いま目の前で成長しつつある子どものために良い生活の場を与える仕事をする人がなければ——この場合、実践と学問とは密接不離である——と思ひ返す。そうすると、中間の仕事自体が興味ある領域となる。この時代に、子どもを守る仕事には大変なことが多いが、それは、子どもから得るたのしみが大いことに伴う税金のようなものかもしれない。

（津守 真）



◆多領域包括的教養的に思索するあり方

最近筆者が多少のやりとりをしている松居友氏が、彼が設立し館長を務めるミンダナオ子ども図書館のホームページ中で、絵本にかかわる人々から、絵本がつまらなくなつた、という苦情が聞こえてくる、と書いています。そこでは絵本やその出版に纏^まわるお話をされていますが、『幼児の教育』誌のありようや、保育における知のあり方にも通じるように思い、痛く共感しました。以下にコメントからのごく一部ですが抜粋します。

出版の本来の意味は、時代に向かって語りかけ、時代を切り開くこと。

子どもや若者達の羽ばたきや旅立ちのきつかけを
 作ることだと思ふのだが……。(中略)

絵本から、絵本の発想を得て、絵本を作るといふ、
 絵本から抜けられない絵本が多い？

絵本の外的世界から、絵本という形で本を作り、

子どもの心を、絵本の外的世界へダイナミックに
 向かわせる絵本が本当に、無い、と感じる。

他の絵本を見て、絵本に興味を持ち、絵本の世界
 から、絵本を作る。三次産業的に絵本は、3番煎
 じの出廻らしのような感じがあつて、絵本で育つ
 た？ ぼくには、趣味的でおもしろくない。

松居氏のこのコメントに触れる前から、筆者が今
 回の特集で取り上げようとしていた記事の一つに、
 一九七二（昭和四七）年、第七十一巻第十号の編集
 後記があります。この号には、24ページもの誌面を
 割いて、「木材の話 山本孝先生をかこんで」と題
 する記事があり、山本孝、周郷博、田口恒夫、津守
 真各氏による座談会の様子が書かれています。文字
 としていくらか体裁を整えてありますが、おそらく
 はほとんどがお話しされた言葉そのままです。山本
 先生は、木材のご専門家で林野庁の方のようです。
 当時、津守、田口らのいたお茶の水女子大学児童学
 科というところは、山本先生に限らず、棟方志功、

一番瀬康子など、実に多彩なゲストを伝手^{つて}さえあれば分野など限定せず講師に招いていたことで有名でした。真に一流であるということだけが基準であつたのかも知れません。そして、この座談会記事に限らず、たとえば「幼稚園教育実指導研究会」というところでの、美術や絵画あるいは言語についての講演など、かなり長い講演録を、ほとんど手を入れずそのまま掲載するということが、『幼児の教育』誌上では頻々とありました。

さて、件の編集後記に戻りましょう。二〇一一年の現代にあつては、木の家具、木のおもちゃなど、その良さについてことさらに述べることもなく、むしろ、言い古されている気さえします。しかし一九七二年といえは、第二次高度経済成長期と呼ばれる波が終えんを迎えつつあつたものの、まだまだ経済効率や生産性の高さなどへのしつかりとした反省はなされ得ず、自然のものよりも人工の物を尊び、消費を美德とする時代であつたでしょう。大量生産大量消費への疑問やしみじみとした後悔が出てくる

のは、無批判にそれらが受け入れられ実行された時代を経てしばらくしてからのことです。

一九七二年のこの巻末文章について考えている時にちょうど、前掲の松居氏のコメントに出合い、また、時を同じくして、保育家具や工芸家具を作る仕事をしている知人から、古いからという理由でモノがどんどん容赦なく捨てられている時代があつた、というお話を伺いました。そして、その中でも捨てられずに今も残されているものに出会うと、よくぞ捨てられずに残ってくれた、と感慨を深くすると。けれど、その残されたものの中には、たとえばペンキが幾重にも塗り重ねられた古い古い木の椅子があつたりする。半ば無思想にいささか乱暴にペンキを塗り重ねたことを、ただいけないことだつたと批判し軽蔑して無理やりペンキをはがそうとするのではなく、古い木の椅子であることと、ペンキを塗り重ねてしまったことやペンキをはがせば椅子そのものを傷つけるかもしれないこととの両方を、年輪として過去として今この時に背負つてしか、もの作

りをする人間としてこの椅子と向き合うことはできない、という言葉は、人と歴史とのかかわりの深淵をとらえているように思えました。

時代の要請するものが大きく変わっていったその時はまさに、合成樹脂に代表されるような新しいものが良いとされるような、まだまだ科学信奉とでもいう世の雰囲気があったのではないかと思います。

古くはオーソドックスであったものを失うことへの警戒と、それが柔らかい皮膚をもつ子どもという生命体によからぬ影響を及ぼすであろうという懸念は、どんなにか先駆的であつたろうと思います。

また、続いて載せた第八十二巻第七号、第八十三巻第五号はそれぞれ、本田和子氏、皆川美恵子氏により書かれたものと思われませんが、幼児教育という営みそのものを超えた、別の枠組を必要とするような、深さのある論考です。広義の児童文化に造詣の深い皆川氏らが時の主幹本田氏を支えて編集にあたられた折には、このような「文化の香り高い」編集後記になることもたびたびでした。門外漢にとって

は、その道に通じていることにひたすら感心するよりほかなし、という格別さでした。

「編集後記」

第七十一巻第十号（一九七二年）

現代の私どもの生活、そして子どもたちの生活の中から失われつつある大切なものがいろいろあるが、物的な環境の中からその一つをとれば、木材の建物や家具である。今月号の山本孝氏を囲む懇談会では、新しく学ぶところが数多くあった。木の床や木のいすは、冬暖かく夏涼しく、体の湿気を吸って人の健康のみでなく、気持ちに落着きを与えるということ、幼稚園の環境づくり、新築、改築のときなど、考慮せねばならぬことがいろいろ示唆されている。先日、幼児用の木製のいすをそろえたいと思いい、業者に注文したが、どこでも量産していないということに驚いた。子どもものに落着きを与えたいと思えば、パイプ製ビニールばりのいすよりも、木のいすがはるかにまさっていることは、うなずける。

幼児の生活が快くなるように、木のいすが再び量産されて簡単に手に入るようになることを望みたい。

現代の生活の中から失われつつあるもののもう

一つは精神的なもので、空想や想像の生活である。

子どもたちは一枚の紙きれ、一片の木片を、生きているかのように話しかけたり動かしたりしてあそぶ。

お人形を自分自身のようにかわいがる。以前に番町幼稚園におられた徳久先生からうかがったことであるが、先生の若いころの毎年の仕事の一つは、担任の子どもたちの一人ひとりに、その子のお人形を作ってあげることだったという。いまの人形は合成樹脂で作られており、修理もできないし、手がもぎれたりよごれたりすると、母親はどんどん捨ててしまう。人形に対する子ども愛着、手がとれてしまった子どもの悲しみに気がつかないかのようである。子ども心もまた摘みとられてしまう。現代の忙しい生活の中で、子どもには人間らしいゆとりを与えるようにせねばならないし、幼稚園が考えねばなら

ぬ課題であると思う。

(津守)

今月号の巻頭は、お茶の水女子大学の現学長、谷田関次氏に書いていただいた。谷田先生は、服飾美学の専攻の学者である。

「編集後記」

第八十二巻第五号（一九八三年）

珍しく雪になった。春一番が吹いたというのに、冬が巻き返しに出ているのだろうか。窓外に、霏々と降りしきる雪片を見ながら、五月号の奥付を書く。月刊雑誌とは、奇妙なものだ。

然し、考えてみれば、子どもは「幼児教育」という名の営みにおいて、同じようなことをくり返しているのではないか。いま、「四才」の彼らと対しながら、子どもまなざしは、時として何年か先だけを注視する。彼らのはずむ呼吸や汗のにおいにもまして、「大きくなったときに困らないこと」が気になる。空想の未来が、子どもたちの「いま」を凌駕

するのだ。

しかも、私どもは、何故かそのことのおかしさと空しさに気付きにくい。雪降りの日に、五月の保育を語ることの不自然さは自覚されても、四才の子どもを大人の時点で直結させることの不確かさは、意識されにくいというのだろうか。彼らが大人になつたとき、その世界が、私どもの予想の範囲内にあるという保証は何一つ与えられていないというのに。

そこで、五月の風を想定することを止めて、とりあえずは、窓外の雪を見つめてみる。高層ビルの外に降る雪は、大まかに、二通りの動き方をしている。私に近い手前の雪は、頼りなげに浮遊し、横に流れて、地上に真すぐに降りていかないように見える。然し、その向こう側で、遠くに降る雪は、ちらつきながらもほぼ真すぐに下降し、地上を白く埋めていく。ある程度の広さで把えるとき、雪は截然と二つの動きを示して、遠近法的な把握を、さながらにモデル化して見せてくれる。つまり、「いま」を熟視

するということが、遠くを見ることでもあるということだ。私どもは、子どもたちの「いま」を熟視しているだろうか。(H)

「編集後記」

第八十二巻第七号（一九八三年）

幼年期の終息を、「決定的な喪失」の訪れとして把えた詩人があつた。一体、何を喪失するのか判然としないままに、子どもは、その喪失を一種の寒さとして実感するという。

とすれば、幼児と呼ばれる幼い人たちを脅かす正体不明のあの不安、例えば、気がついてみたら親しい人々がみんないなくなつて、たった一人、見知らぬ世界に遺棄されているのではないかという、あの捨て子の不安や、いつもと同じ道を歩いているつもりが、いつかとても迷い迷路に迷いこんでしまつて、どこまでいっても家に帰り着けないのではという、ゆえもない迷い子への恐れなど、この訪れる喪

失への予感とその先取りと言えるかも知れない。私どもにとって、置き去りにされ、見捨てられることへの脅えは、懐しい悪夢とでも言うべき奇妙な想い出の一つであるように見える。

私どもは、誕生という形で始原的な分離を体験している。母胎内の至福の安息、フロイト流に言うならニルヴァナの状態からのこの分離は、私どもに、元型的な捨て子体験として刻印されるのではないか。そのゆえに、数多くの民族が、その始祖神話を一種の捨て子物語として語り始めるのかも知れない。偉大なる始祖の神は、しばしば、両親に遺棄され、あるいは両親を失なった孤児として、この世に出現し、そのゆえの迫害の中で様様な奇蹟を発現して神性を顕現するのである。

人々は、みずからの始原的な捨て子体験を、神話という象徴言語で語り継ぎつつ、自身への慰めと励ましとしたのもあろうか。私どもは、「常に捨てられつつある」人間の、とりわけ幼い人たちの孤独に対して、鈍くあつてはならないだろう。

(H)

「編集後記」

第八十三巻第五号（一九八四年）

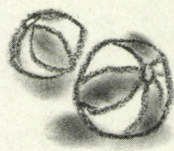
京都を訪ねた昨年のこと、府立総合資料館の幾重もの扉を鍵で開けた向うの、玩具保存庫で、日本各地の郷土玩具を眼のあたりにすることができました。石沢誠司氏は、私どもを案内して下さった玩具部門の専門員で、その折、約した依頼が実り、今号の掲載となったのです。

郷土玩具のうち、私どもは、伏見人形の魅力に吸い寄せられていきました。学業成就をかなえる牛乗り天神、火防せの神であり、安産の守護もする布袋、子どもの湿疹・クサを食べてくれる牛、夜泣きをとめる鳩、子どもが亡くなった時、埋葬に用いる友引き人形、デンボ・ツボツボと呼ばれる器類……、どれもこれも呪術的な魔力を秘めた土人形でした。

さて、旅の終りに、五色の楓を観るべく泉涌寺へ足を向け、塔頭廻りをしていた時のこと、伏見人形とは、このように使われていたのかと、まざまざと眼にとびこんできた光景があります。七福神の一つ

布袋をまつるその塔頭では、安産祈願を司どり、岩田帯を授け、井戸から独沽水を汲みあげます。そして椎の実がこぼれる境内の一角には石船があり、そこには、安産の願がこめられた伏見人形の布袋たちが、たくさん堆く、積みあげられていたのです。色もはげ落ちた古い布袋たちは、にこやかに笑っていましたが、どれだけの京童をこの世に連れ来たったことでしょう。

布袋は、九世紀から十世紀頃の中国の僧で、位や名声を望まず、生涯、杖と袋で、放浪生活を送りました。日本では、布袋は唐子と取り合わされ、絵画に頻繁に登場してきますが、袋の中から、子どもたちがワアッと出てくる図像など、布袋は子ども宇宙を支える管理者の如き趣きがあります。大きな腹をした、のどかな布袋は、どこか狸にも似ていますが、狸は徳利とお通いを手にして、子どもとは遊んでくれそうにありません。(美)



◆誌面作りへの直截な言及と支え手への賛歌

編集主幹を中心に、編集にはいろいろな人たちの手がかけられています。編集そのものについて触れた編集後記の何編かに触れてみたいと思います。

「編集後記」

第八十三巻第十二号（一九八四年）

一九八四年も最終号を迎えた。雑誌の凋落が著しく、本誌もその例外ではない、しかし、とにもかくにも、一年の歩みを終えた。

この一年、教育の世界は、必ずしも、よい方向にのみ動いていたとは言いがたい。教員養成に関する再検討、あるいは教育要領改訂への始動、そして臨教審の設置など、公に主導される様々な改革案は、そもそも、何を志向し、何をはらんでいるのだろうか。公の側が改革に熱意を示すときは、それだけ現行秩序が脅かされ、危機感が高まっていることの徴であ

ろう。関係者一人々々の善意を超えて、それは、現行秩序の維持に奉仕する動きである。そして、私も「大人族」は、よくも悪くも、現行秩序の側に属していることを忘れてはなるまい。公の動きに加担するにせよ、それを批判して異を唱えるにせよ、あるいは無関心であるにしても、それらはいずれも、現行秩序の体系に、既に組み込まれ、一つの位置を獲得した者の立場からなされる営為なのだ。「教師」といい、あるいは「母親」というも、すべて現行秩序の中で公認された「ポジション」であり、「役割」であることは自明なのだから。

子どもたちが、秩序の枠組から自ずから逸脱し、その特有の生を自在に紡ぎ出す存在であるとすれば、私も大人は、明きらかに彼らとは異なつた岸辺に佇んでいる。とすれば、私たちは、メディアエーターなのだろうか。私たちの営みは、みずからの身体を介して、この両者を「とりなそう」とすることかも知れない。

子どもの存在そのものを、時々刻々、活性化し新しく蘇らせることの意義は、ここに見出される。本誌が、新しい年も発刊を続けようとするこの意義も、恐らくは、ここに求められるであろう。(H)

〔編集後記〕

第九十五巻第五号（一九九六年）

今月から「子ども時代と私」の連載が始まりました。戦時下に子ども時代を過ごされた大先輩の方々がご自身の幼少時代をどの様に記憶されていらっしゃるのかを、貴重な資料とさせていただきました。画致しました。そこから逆にこれからの幼児教育の中で大切にしていこうことに思いを巡らせることができると考えています。

*

この連載のスタートと期を同じくして、今月号には、二十世紀の終わりと二十一世紀への橋渡しを考えさせられる記事が目だったように思います。

本誌の創刊も二十世紀と共に始まったことを思う

と、隔世の感がするとともに、私たちが大切にしたいものは脈々と続いて変わらざることと思われれます。ただ現実の環境には、それを行うために多くの障壁があるのも確かです。それを一番痛切に感じているのは、子どもたちと日々を過ごされている保育者の方々かもしれません。しかし「保育の実践研究について考える」の記事の中に書かれている「日々の保育活動と深く結びつき、より充実した保育を実現できる方向で実践者を生き生きとさせるものになる」ような保育現場からの実践研究が、それらの障壁を乗り越えていく一つの力になるのではないかと考えます。

このような記事を載せていく企画も現在検討しています。
(田)

〔編集後記〕

第一〇〇巻第一号(二〇〇一年)

明けましておめでとうございます。

『幼児の教育』は今月号で第一〇〇巻を迎えまし

た。一九〇一年の創刊以来、二十世紀と共に歩み続けてきた本誌ですが、こんなにも長く続いてきたのは、多くの執筆者や読者の方々のご支援のおかげと感謝しております。今後ともどうぞよろしくお願ひ申しあげます。

*

今年には創刊一〇〇巻を記念して、毎号、これまでの本誌にゆかりの方々にご執筆いただく予定です。また、四月号には、津守真、本田和子、田代和美の三人の歴代主幹による座談会も予定しております。そのほかの企画も準備しておりますので、どうぞご期待ください。

今年には表紙絵を片柳淳子先生に、カットは彌永たえ先生にお願いいたしました。一年間、どうぞよろしくお願ひいたします。

表紙の右隅には創刊号の表紙を載せました。当時の誌名は『婦人と子ども』で、題字を東京女高師校長高嶺秀夫、絵を同教官荒木十畝が描いています。これを編集した東基吉は第五〇巻の記念号に、書い



▲「婦人と子ども」創刊号の表紙

ています。「絵は」何分渋くって地味でパツとしな
いです。∴(題字は)雑誌の表題の文字として素人
向きがしません。私も弱りました」。私はこれこそ
本誌を代表する表紙であると思っていましたので、
これを読んで、大変驚きました。

(A)

「編集後記」

第一〇〇巻第十二号(二〇〇一年)

創刊一〇〇年を記念して、毎月それにちなんで記
事を載せてきた一年も本号で終わりを迎えました。
本誌にゆかりのある多くの方々にいただいた原稿か
ら、改めてこれまでの経緯を知ることができ、また
時代の推移も感じた一年でした。

この巻を閉じる本号では、一〇〇巻にちなんだ文
章の中で「本誌が一年一年と少しずつ保育者には何
の役にも立たないものになってしまい……」という
厳しい言葉を頂戴しました。保育者を指導する。本
誌がかつて大きな役割を背負っていたことを改めて
思わされます。今の本誌はそのような役割を担って
はおりませんが、「保育者に考えるチャンスを与え
る」ことと「現場の保育者と同じに幼児を常にみつ
め、これからもみつめていく」ことを肝に銘じて、
保育者に伴走する存在でありたいと考えています。
本号にはまた、保育者が自分の保育を振り返り

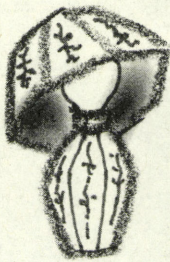
「自分と向き合う時間を重ねて、ようやく原稿が書き上がる」プロセスが書かれています。「書く」とは、消化しきれずにたまっていったものを反芻し、きちんと消化しなおすことであつたのだと、いまあらためて思う。消化したものは栄養となる」という一文は、保育者のひとつの学びの在り方を示唆し、また他の人が書いた文章を読んで自分の保育を考えることもこの延長上にあるのだと思います。

この小さな雑誌にできることは何か。課題が山積みにされた一年でした。第一〇〇巻は幕を閉じますが、これからも課題は追求し続けていきます。

(田代 和美)

紙幅の都合で掲載できないことが残念ですが、二〇〇一年には毎号、一〇〇巻を記念する記事が掲載されています。特に「『幼児の教育』と私」と題する記事には編集を陰で支えた方々が何人も文章を寄

せておられ、その明るい苦勞ぶりや編集を通して感じ考えたことなどが生き生きと書かれていて大変興味深く、また感慨深いので、ぜひお読みいただきたいと思います。当時編集主幹であつた田代和美氏の、陰にひなたに編集を支える支え手へのまなざしを思い、一〇〇年続いた雑誌を誠実に、今この時に引き取り未来へつなげていこうとするその見識と覚悟の深さに頭が下がる思いがしました。また、その巻の第一号で津守真氏が「私が『幼児の教育』誌の編集にたずさわった頃」という一文を巻頭に寄せており、後の者にはおよそ知り得ない倉橋や及川氏との編集の様子や創刊時の編集者東基吉について、また、教育基本法との関係をどうとらえるかについてなど書かれているので、こちらもまたぜひお読みいただきたいと思います。



◆そしてこれからの子ども学へ

今回この原稿を作るにあたって、実際冊子を手にしてページを繰る以上の相当な分量の『幼児の教育』を、パソコン画面上で確認しました。ネット公開にこれほど助けられることがあるとは、通常やはり紙の感触のある媒体でものを読むことを好む者としては、まったく想像していませんでした。そして、その中から、これもまた相当な量の記事の打ち込みを受け、職場の仲間である満田琴美さんが一手に引き受けてくれました。ちなみに、一月号、二月号のアーカイブズ特集に登場した記事の打ち込み作業もほとんどすべて満田さんの手になるものです。心から感謝です。

また、数年前から筆者は、編集風景に近いところに身を置くようになり、ときどき編集部の人たちの下支えの様子を目にするようになりました。執筆者、編集サイド、出版サイド、三者をもち立て、やる気を削がぬよう、誰の言い分も聞き過たぬよう、仲を

取り持ち形にしていくその繊細な心配りや誠意たるや、とても言葉に尽くせません。

これからの時代、私たちはネット版の『幼児の教育』を多用することでしょう。それでも、本にはめぐる時の音、紙の質感、綴じ部分へと誘われることでその世界に入っていくような心地よい緊張感、高揚感があります。手に取り、表紙を見、本を裏に返して1ページめくって編集後記を読む。うなずいたり首をかしげたりしながら編集後記を読んでみて俄然、本編を読もう、という気持ちが高まる。そんなふうに『幼児の教育』と毎号つきあってきた読者を、私は一人ならず知っています。読んできた質量かたちを実感し得る媒体として残してきたこと、その実体ある冊子をほかならぬ生きた人間が作り続けてきたこと、そんなことの意味も問いつけていきたいと改めて思うのです。

最後に、二〇〇七年五月の、現編集主幹浜口順子による編集後記を掲載し、この小さな冊子にかかわられた、またかわられるであろう人たちへのはな



むけとしたいと思います。

(お茶の水女子大学専任講師)

「編集後記」

第一〇六巻第五号(二〇〇七年)

北海道は桜がこれからのだろう。以南の日本ではそろそろ百花繚乱の5月である。数年前に「世界で一つだけの花」という歌がはやったが、近ごろの流行歌のタイトルにはやたらと「花」が目立つような気がする。星先生(巻頭言)によると、フランス語で「発達」という言葉には「花が開く」という意味があり「喜びに満ち満ちて顔が輝いている状態」のこともいうと知った。オランダに2年ほど滞在していたころ、その長い暗い冬の終わりに、道端でクロックアスが土をもたげて顔を出しているのをふと見出した時、飛び上がるほどうれしくて、喜びがこみ上げてきたことを思い出す。現代という季節が「花」を求めているのだろう。喜びに満ち満ちて顔が輝く子どもの姿を待ち望むような保育を目指したい。

(H)

*この特集は今号で終了いたします。

園のくらしを育む 12

子どもたちの姿(2) — 試行錯誤の価値 —

秋田喜代美

1 試行錯誤する学び

大人から見えて「ムリ・ムダ・ムラ」に見えるものの中にこそ、子どもが育つために必要なものが潜んでいるのではないか、保育の場は、ムラのあるムダに見えるすき間だらけの遊びや冒険に挑戦することを保障する場であってほしい、と前に論じたことがある。^註 子どもの育ちを線形に進む発達観でとらえる見方に対し、日々の営みの中で起こる子どもたちの育ちは行きつ戻りつである姿に学ぶことが、子どもの暮らしを豊かにしていく。それを示す言葉の一つが「試行錯誤」だろう。辞書で「試行錯誤」という言葉を引いてみると、「新しい物事をする際、試みと失敗を繰り返しながら次第に見通しを立て、解決策を見出していくこと」とある（『大辞林』）。繰り返ししていく

うちに見通しが見えてくることを、子どもたちは日々経験している。

「試行錯誤を繰り返しながら科学する心をふくらませていく子どもたち」という柏みどり幼稚園の公開保育実践発表会に参加させていただいた。どの園でも子どもたちが経験する、ものを転がす遊びを、「もつと長くしよう」「転がすだけではなく、転がした先でゴールするようにしていこう」という年中組の実践だったり、年長児が自分たちのクラスのある二階と外が離れているために、外で遊んでいる人に片付けの連絡などの声を伝えたいという思いから、延々何メートルもの声のトンネルを作り始めて成功している実践である。

ころころ遊びの実践記録から、転がす遊びの質の変化を私なりにとらえてみると、九つ以上の挑戦と質の変化が見られていた。団子作りでその団子をたまたま山から転がしたところから遊びは始まる。次第に転がすこと自体が遊びになって、坂道探し、転がしやすい坂道作り、転がすものに注目し、また速さにも注目するようになる。そしてもつと大きな坂道作りから上り坂が出来たり、転がしたものが脇から落ちない坂、スタート位置の意識や長く転がる坂道などをとらえていく。そして転がしたものが最後に入るゴール作りや、最初に転がす発射台などができていく。

子どもが試行錯誤する中で子どもたちは自分の持てる力を発揮し、仲間とかかわる中で知恵を出し合うことで次に見えてくる解決を試みていくと同時に、新たな課

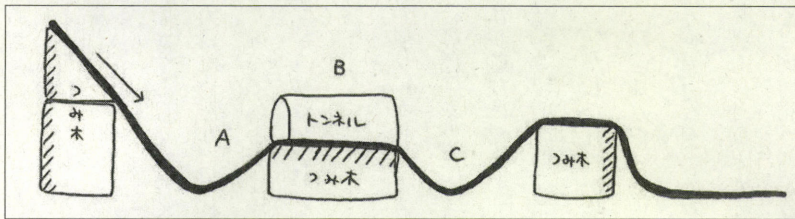
題を自分でつくり出しては解決していく様子が見えてきた。

もちろんそこには保育者はその活動を認める時間や空間、素材を保障し、一人ひとり転がしていたものを皆で一斉に転がすよう働きかけることで気付きを生み出したりはしている。

そしてこの活動は年長組になると、今度は曲り道を作ったり、障害物を作ったり、坂の素材と形態を考えたりと、さらに高次なところ遊びへと経験を積み重ねて展開していく。

2 試行錯誤の偶発性が生み出す子どもの関係性

試行錯誤は、子どもたちに思考や協働の機会を生み出すとともに、子どもの関係性も変えるのだと感じた。坂道遊びが始まった時には遠慮がちだったT君。担任保育者は、「T君は競う二人を応援したり『S君の勝ち』と審判することを楽しむ。あまり自分では転がさない」とある。ところが上り坂作りなどの工夫が始まると、「今まで見ている側だったT君が何度か転がしてみる。するとT君だけが一回だけ何とかなり坂を超えることができた。まわりの子が『T君のよく転が



▲段ボールの坂道

るね」「T君すごい」と認める」と記述されている。少し控えめだったT君のものが偶然にも転がったことから人間関係が変わり、T君はより積極的に活動に参加していくことになる。子どもたちは素直であるから、すごいことができた時にはそれを認めている。そしてそのうち、今度は図のように4メートルほど長くつなげた段ボール坂道がうまくいかない時には、段ボールと積み木の関係などで「もう少し（積み木を）入れた方がいいよ」と案を提案するまでに、変わっていく。

T君を中心に描いた実践記録ではない。たまたまT君が書かれているところをつないで読んでいくと、試行錯誤だからこそ、T君が偶然性やいろいろな役目をもって参加できる機会を得ていくことも見えてきた。子どもたちは、一見ムリなことに挑戦することで試行錯誤して、時には無駄な努力をしながらも、ムラから生まれる偶然性の中で新たな関係を編み出していく。これが遊びにおける試行錯誤の醍醐味ではないだろうか。

園だからこそできる試行錯誤を見守れる保育者の中で子どもは育つと感じた保育だった。
(東京大学大学院教授)

注(引用文献)

秋田喜代美「保育の未来「暮らしと遊びを創り出す保育」：ムリ・ムダ・ムラへの志向性」
(無藤隆編『THE保育 101の提言 vol.1』フレーベル館 二〇〇七年 p.8, 11)

保育の現場から

縁という細い糸

永倉みゆき



「何たる縁か。こうして親しく、あなたの為には大切な幾とせを、日々にいっしょに楽しみ得たことか。」
（倉橋惣三「子どもたちを送る日」^{注1}より）

のだろうか。そしてこんな時は、目の前にいる子どもたちだけでなく、今まで出会って送ってきたさまざまな子どもたちの思い出が胸に去来する。

春めいてきた日差しの中でこの言葉に出会うと、思わず涙腺が緩んできてしまう。一年の中でも三月は特別感慨深い月である。進級や卒園を控え、今の生活との別れと新しい世界への出発への期待が交錯する三月の日々のかげがえのなさがその思いを生む

K子は、三年保育で入ってきた、おかつばでかわいい子どもだった。他の三歳児たちはまだまだ幼く、毎日思いもかけぬ天衣無縫ぶりを見せてくれる中で、K子はどちらかというとしつかり者という印象であったのは、凜とした顔立ちのためばかりではな

かつただろう。生活の中で困ることもなく、年齢よりずっとしつかりして見えるK子は、実はいろいろなうっかりしている（三歳児クラスだから当たり前だが）面もあつたのだが、何となく周囲から「しつかり者のK子ちゃん」というイメージで見られてしまっていることが、時には大変そうでもあつた。

こんなことがあつた。それが何だつたかは記憶の中で定かではないが、普段の生活の流れと違う何事かがあつた日のこと、K子はいつもの様にやろうとして、自分が違っていたことに気づき、「自分はちゃんとやつたのに違つてしまったこと」に大いに傷つき、その「いつもと違うことがわからなかつた自分」にも腹を立てるかのように、いつまでも泣き続けた。母親が迎えに来ててもK子は大きな目を涙でいっぱいにして、まるで「こんなはずじゃなかつたのに」と訴えるかのように延々と泣き続けたのであつた。K子はただの「大人の意を汲めるいい子」ではな

く、「自分がこうありたいと思うことがあると誇り高くそれを貫く子」なんだ、そんな印象をもつた出来事だつた。

そんなK子が夢中になつた遊びが泥団子作りであつた。好きになるとすごい集中力で没頭できるのはお母さん譲りのK子の魅力でもあつたが、顔に泥じるしが付くのもいとわず、日がな一日せつせと砂場で泥団子を作り続けた。

K子が卒園して何年も経つた日のこと、彼女のお母さんと出会つて話す機会があつた。高校を卒業して、三年ほど経つたところのことである。進学校に進んだ彼女は、今度はお菓子作りで夢中になり、大学の食物学科進学も検討したが物足りず、二年間東京の製菓専門学校で学んだ後、チョコレート専門店への就職を決意したとのことだつた。なんて一途な彼女らしい選択だろう。進学校ゆえさぞかし大学進学

を勧められたことだろうに、一步も譲らない強さに
感心もし、また彼女の選んだ道を尊重したご両親も
素晴らしいと思つた。

機会があつて銀座松屋の売り場にいるという彼女
を出張の折に訪ねたことがある。ちょうどバレンタ
インの時期であり、彼女は数人の御婦人を相手に接
客中であつた。お手並み拝見と少し離れて見ていた。

「これはどんな味なの」「年配の人向きなのはどれ」
「これとこれを詰め合わせてください」「これとどれ
が合いますか」四方八方から矢継ぎ早やに飛んでく
る質問と注文の矢に、にっこりと笑顔で的確に答え
る姿は、もう既に何年もチョコレート専門店に勤め
ている人であるかのように堂々としていた。声をか
けると、「Kちゃん、そろそろ片付けの時間だよ」と
言われて顔を上げた時のあの顔で、「あ、こんにちは」
と言うと、すぐにチョコレートの専門家の顔つきに
なつて「先生、どれにしますか」と聞いてきた。

その後、お母さんにその話をしたところ、幼稚園
時代にK子が泥のごちそうを一所懸命作つていると
ころの写真を見せてくださった。その真剣なまなざ
しが、チョコレート売り場の鮮やかな客さばきの時
のまなざしと重なつた。あの日が、ここにつながつ
ていたなんて……。その後、K子は本店に配属にな
り、まだチョコレートには触らせてもらえないもの
の、何をやつても興味津津、楽しくてならず、夢中
になつてやつていくということであつた。泥団子と
チョコレートトリュフ。自分の信じた道を貫く強い
意志。誰がああ遠い日にこの共通点を想像できただ
ろうか。そして、数年を経た後、なんとびつたりと
そのパズルがはまつたことだろうか。K子は、現在
チョコレート専門店からさらにまた羽ばたいて、自
分が学んだ製菓専門学校で教えているそうである。
高校の時の部活の先輩の結婚式のために、巨大な
ウェディングケーキを作つて感動されたり、その



▲真剣に料理する顔は今の彼女と変わりなく

ウエディングケーキを真剣なまなざしで作るK子の写真を見て、後輩が心を動かされて、自分の進む道を変更したりと、彼女の生き方は彼女にかかわるさまざまな人に、水面に広がる輪のように、静かに伝わっていつている。幼いK子の、真剣に遊ぶ姿の中にあつた喜びの心が、縁の糸でつながったさまざまな人の心の中で響き続ける。

人にとって、幼児期ほど無防備に自分をむき出しにして過ごす時期は無く、そこに居合わせる保育者もまた、その気持ちを真正面から受け止め、普段「大人」には出さないような顔と気持ちでそれと付き合う。いや、意図せずしてそうさせてしまう力が子どもにはある。その両者の真実味がスパークし合うようなやりとりが、保育の醍醐味だと私は思う。

鶴見俊輔は、大人が子どもと向かい合つて惹きこまれる時に、そこに生じるこのような不思議な時間

の流れを「神話的時間」と名付けた。^{註2}そして倉橋は、その子の人生に大きな影響を与えるかもしれない神話的時間に付き合えた幸せに「何たる縁か」と感謝するのである。

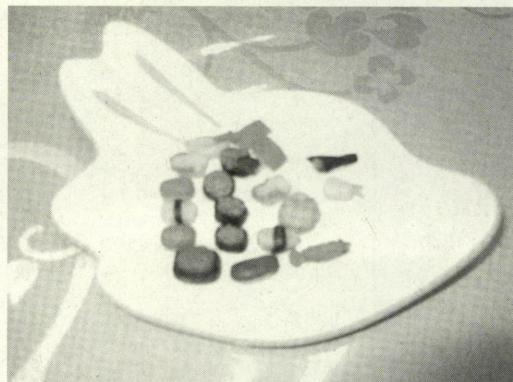
その時は、とにかく一所懸命自分のありつただけで子どもに応じるのだが、それがその子の人生のどの部分につながっているのかはまったくわからないし、そんなことを考えもしない。

それが時として、K子の様に思いがけない人生の展開を知らされることがあると、驚きつつも「成程そう言われれば……」と思いを振り返ってはそのつながりを深く考える機会となる。それはうれしいことでもあり、保育の怖さを知ることでもある。

幼稚園教育要領や保育所保育指針の中には確かに「生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期」「……の基礎を培う」と書かれてもいるし、実際そうなのだろうが、保育中の保育者には、今この

瞬間がその子の人生のどこかにつながっているという意識はないのではないだろうか。そこにあるのは、今、目の前の子どもに、ただただ心から誠実に対応することだけである。

倉橋はまた『育ての心』の中で「教育は育つものに対する信仰である。信仰は如何なる時にも、世界を明るくし、励まし、活気づける。わたしたちが此の今日、子どもらと共に笑い、歌い、遊び得るのも、此の信仰が与える光明によってである。」（「よい子どものために」^{註3}より）と述べている。「信仰」という言葉は、唐突に選ばれた言葉であるかのようにも思えるが、証されていないものを、自分自身の内から湧きおこる確信によって信じきるといえるかにおいて、まさに教育は信仰と同じであるといえるかもしれない。保育者は、子どもがもともと持っているであろう「育つ力」（それは誰もまだ見てはいないにもかかわらず）を信じて、困った時も悩む時



▲小1の時にK子が夢中になった粘土のごちそう作り
(おすし)

も、「きつと大丈夫」「きつと越えられる」と信じ続け、一緒に支えていく。そしてまた保育者自身も、自分の「子どもを信じようとする気持ち」が試される中で成長するのである。

子どもたちと保育者が、共に信頼し合い、精神的なつながりをもちながら生活する様子は、あたかも

「見えない糸でつながっているようだ」と言い表されることがあるが、つながれた細い糸はさらにその子どもの運命の糸の道とも複雑に絡まりながら延びていく。三月にある「進級」「卒園」はまさしく、結ばれていた糸が次の縁に向かって解かれていくその時なのである。

目の前の対応に精いっぱいな毎日の連続だが、実は「いま」というこの時が、遙かな未来とつながっているという縁の糸の先に思いを馳せることも、時には必要なだろう。そんなことに気づかされる三月の保育室である。
(常葉学園短期大学)

注(引用文献)

- 1 倉橋惣三『育ての心(上)』フレールベル館 二〇〇八年
- 2 鶴見俊輔『神話的時間』熊本子ども本の研究会 一九九五年
- 3 1に同じ
- 4 津守真・本田和子・松井とし『人間現象としての保育研究』光生館 一九九九年

編集後記

3か月続いた「特別号」は今回でおしまいです。来月からはまた通常号となりますが、「春号」として季刊のスタートを切ります。月刊『幼児の教育』をこれまで長い間ご購入ご支援くださった皆様に心より御礼申し上げます。

季刊になっても編集方針は基本的に変わりなく、子どもや保育について再発見するサブテキストを目指します。保育現場、家庭、保育者養成校など、子どもと何らかのかかわりある場でお手に取り、喜んでいただけるような内容を企画中です。保育現場からの実践報告、学生のチャレンジ発表、国内外の保育情報、遊び場所・玩具・絵本・参考著書・研究会などのカルチャー情報もお待ちしております。読者の方々同士の交流の場としてご活用ください。(H)

幼児の教育 第110巻 第3号

平成23年 3月1日発行
編集兼発行人 浜口順子
編集担当 金子めぐみ・田中恭子
発行所 日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所 株式会社フレーベル館
☎03-5395-6604 (編集)
振替 00190-2-19640
印刷所 図書印刷株式会社
定価 550円(本体524円)
©日本幼稚園協会 2011 Printed in Japan

編集協力 フレーベル館
表紙絵 後宮ひろみ
扉題字 津守 眞
本文カット 田崎トシ子
編集スタッフ 吉岡晶子
佐藤寛子

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613 (営業)

●次号予告 新しいコーナーがスタートします！●

特集 問い直そう、保育の中のあたりまえのこと
シリーズ 子どもが育つ場所を訪ねて
実践研究 保育事例をめぐる対話
連載 再読・倉橋惣三 ほか

☆次号の内容及びタイトルは、都合により変更される場合があります。

『幼児の教育』バックナンバーがネットでご覧になれます！

お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション"TeaPot"
<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/3705/bulletin/>
へ、アクセスしてください。

明治34年発行の創刊号から、現在、平成19年発行の第106巻まで公開されています。ご意見・ご感想などは、youjimap@yahooc.co.jpまでお寄せください。

55冊の絵本紹介！ 読み聞かせのアイデア、エッセイまで！
読み聞かせの達人による、絵本ガイドブック

聞かせ屋。けいたろう 絵本カルポナーラ

～ おいしい絵本を召し上がれ！～



絵本を子どもにも大人にも！

著者が読んできた秘伝の 55 冊の絵本を、オールカラーで掲載。作品紹介、読み聞かせの Q&A からテクニック紹介まで。読み聞かせの活動を通した、新たな絵本の魅力が満載の 1 冊！

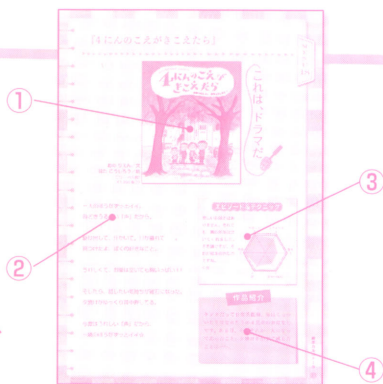
聞かせ屋。けいたろう／著

21×15cm 96ページ 定価 1,260円（税込）

10921

作品内容、読み聞かせのエピソード&テクニックや、はたまた、読み聞かせ実況中継まで！
素敵な絵本との再会をお届けします。

- ① 絵本表紙
- ② けいたろうコメント
- ③ 読み聞かせのエピソード&テクニック、
作品データ
- ④ 作品紹介



好評発売中

“森のようちえん”での活動を撮った18万枚の写真から厳選！ 保育・子育てのエッセンスが詰まった写真集

子どもと森へ出かけてみれば

小西貴士 / 写真・ことば

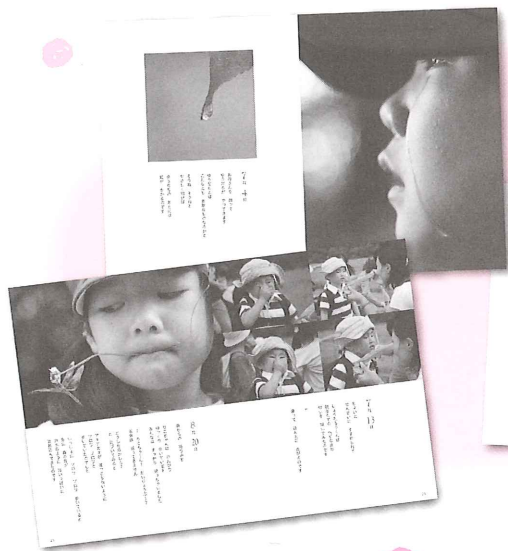
自然の中で子どもたちは
こんなにいい顔するんだな

いろんな葉っぱがあるけれど
同じ葉っぱはないように
あなたはあなたのままでいいですよ
そのまんまが素敵です
森は、そんな風が吹いている場所
ページをめくり
森のお散歩を楽しんでくださいな

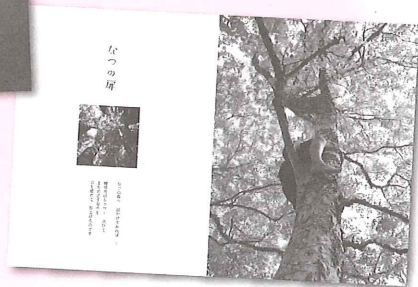


24×18cm 76ページ 定価 1,575円 (税込)

10920



オールカラー



- 四季の森で育つ子どもたちの写真とやさしいことばで織り成すっておきの世界
- 巻末「子どもと森へ」
寄稿：汐見稔幸氏、上遠恵子氏、細谷亮太氏

定価 五五〇円(本体五二四円) ☆

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。